
同窓会で逢おうね

桜坂 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会で逢おうね

【Nコード】

N2448B

【作者名】

桜坂 恵

【あらすじ】

高校卒業以来、二十年振りの同窓会。その席上、准哉と祥子は、昔お互いが想いを寄せ合っていたことに初めて気づく。同じく同級生の藤川も、祥子の引き合わせで、かつて奇妙な縁をもつ女性と恋に落ちる。祥子は准哉との許されない恋に悩む。二つの恋の行方は・

第一章「同窓会」 その一（前書き）

以前「恋」と言うタイトルで、短編として投稿しておりましたが、今回一部を改め、連載形式で再度投稿しております。

処女作でもあり、思い入れがあります。今後、現在続編の執筆中です。本編の掲載終了後、すぐに続編の掲載を始めたいと思っています。

第一章「同窓会」 その一

第一章 『同窓会』

すっかり化粧が落ちてしまったまま子どもの様に寝入っている顔を見ていると、

さっきまでの激しい反応がまるで嘘のように思える。

日曜の朝。六時。祥子との初めての朝。

そろそろ起こさなければならぬと思いながら、俺は、このままいつまでも、

その姿を見たい気がしていた。

シーツから零れている乳房の白さと、乳房の先にある小さくて色の薄い乳首。

今は隠れているが、くびれた腰。きれいな臍をしていた。

弾みでこうなってしまった。ふつうに考えれば、そうだろう。

だが、この時、俺にはとてもそうは思えなかった。

「運命」そんな言葉が、ふと

浮かんだ。

何かが始まった。

それが、二人にとって、いいことなのかどうか、

判断はつかない

にしても。

二月最後の土曜の夜。二十年振りの高校の同窓会。
一次会は焼き肉屋だった。

「卒業の時に決めてた幹事の増田君が、なかなか企画を進めない
中に、

とうとう二十年も経ってしまいました」と、この同窓会を企画した
山瀬が

自己紹介の挨拶で暴露し、座を沸かせていた。

みんながどつと笑ったその時、入り口近くの席から、一番奥の俺
の席まで

グラスを持って移って来た女。

祥子だった。

俺の左側に来ると、「おっす！」と軽く俺の肩を叩いて話し始
めた。

「お久しぶり〜佐藤君。ねえ、あたし、わかる？」

同級生から「佐藤」と、苗字で呼ばれるといかにも久しぶりだ
という気になる。

あの頃は、准哉 シュンヤ と呼び捨てだった。

「おう、久しぶり。祥子。わかるよ、全然変わってないやん。」

祥子は本当に相変わらず明るい。

祥子がクラスの雰囲気明るくしていたことを、懐かしく思い出
した。

「うそ、変わってない？それってまだまだ若いってことよね？嬉しい！」

「ハハッ、そうそう。全然全く。」

「あれ？ひょっとして成長してないってことか？」

「それはお互い様。でもよく俺がわかったな？」

「そりゃ判るわよ。あたしは准哉君を見忘れたりはしないって。」

「そっか、さすが祥子やね。さつきからみんなに、お前が一番変わったって言われてばかりなんや。誰か判らなかったって。」

「へへへ・・・ごめん。ほんとさ、さつき山瀬君に聞いたの。彼は誰って」

祥子は頭を掻きながら、さも可笑しそうに笑った。

「なんじゃそりゃ。まいったなあ。俺、そんなに変わったか？」

「うん。でも悪い意味じゃないよ。あの頃よりずっとかつこよくなってる。」

「ハハハ、またまた。なんも出ないぞ。」

「あはっ。残念。でもウソじゃないって。あっちで加奈子ともそう話してたんだよ。」

「ほいほい、ありがと。」

祥子との話し方は昔からこうだった。まるで男友達と話しているようだ。

どんなことも、ポンポンと話せる祥子は、男子からそこそ人気があった。

同級生ってのはどうしてこうも気軽に話せるのだろう。

二十年振りだとはとても思えない気安さ。

その気安さが、時折、とんでもないことの引き金になったりする。

俺は、ほんのちょっと悪のりをしたのかも知れない。

二十年、誰にも話さなかった淡い思い出を、

祥子本人に話して見たくなった

のだから。

第一章「同窓会」 その二

「俺さ、お前のこと、好きやった。気づいてた？」

俺の突然で予期せぬ問いかけに、祥子は目を見開いて驚いたように、

「えっ、ええっ。何なに？ウソばかり・・・ホント？なんで？いつよ？」

祥子は訳のわからない狼狽振りで答えた。

「二年の時。誰にも言わなかったから、気づかないよな。」

「そうよ。だって准哉君は・・・。」

そこで祥子は言葉を切って、祥子の左後ろで談笑しているミチコの方に、
チラッと視線を送った。

「ああ、そう。少しの間つき合ってた」

祥子の視線の意味を汲み取って俺は答えた。

「でも、ほんの半年や。つき合い方も子供やったし。」

そう言いながら俺は、今の幸せ振りを、全身にまとったブランド物の数で

表現しているような、ミチコの横顔をもう一度見た。

祥子は、ミチコを見ている俺の顔を、まじまじと見つめて、笑い

ながらこう言った。

「そんなのずるいよ。准哉君こそ知らなかったでしょ？私の・き・も・ち」

今度は俺が驚かされる番だった。

「うそ？うそやろ？」

「なんや、だったら告白すればよかったのか？」

俺の言葉に祥子は

「ばっかねゝあたし達。お互いだったなんてねゝ。」

そう言ってさも嬉しそうに、昔を懐かしむように、笑った。

「何々？どうしたの？」

割って入った加奈子の声に周りの視線がこちらに集まった。

祥子が「何でもない。飲もう！」と言うと、

誰かが「そうや、飲もう」と応えて、今日何回目かの乾杯が始まった。

その後も、俺と祥子は、お互いの家庭のこと、仕事のこと、ゴルフのことや、最近見た映画の話など、とりとめもなく、飽きずに話した。

「今夜は朝まで付き合ってよね」と祥子が、冗談とわかる軽い調子で言った。

俺はわざとそれを、真に受けた風に装って、

「お誘いとあらば、喜んで。」と応えた。

祥子はちよつと悪戯っぽく、

「ほんとにつき合つ勇氣ある？」といった。

「もちろん。」

俺はそう短かく言つた後、わざと祥子の側を離れ、他の同級生達の輪の中に割り込んだ。

こうして、俺は、祥子の戯れ言を「密約」に変えた。

二次会が終わつても、大抵の者がなかなか解散せずにはいた。店の前の歩道で別れを惜しむように、思い思いの相手と、いつ終わるともつかない挨拶を交わしていた。

俺もしばらくは、皆に合わせて挨拶の輪の中にいた。

そのうち、とうとう焦れつたくなって、そつと祥子の後ろから、声を掛けた。

「おい、行くぞ」

そう言つて、他の者に見えないように手を取つて歩き始めた。

ほんの少し躊躇する様子を見せた祥子は、それを自分で振り切るように言つた。

「よし、行こう。レッツ・ゴウ・ツウ……どこに？」

第一章「同窓会」 その三

「わあ、私、酔ってるわ」

祥子はホテルの部屋に入ってから、自分の大胆さに驚いた様に声をあげた。

その頃になってようやく少し理性が頭をもたげて来たのだろう。まるでそれを抑えるかの様に部屋の冷蔵庫から瓶ビールを一本出して来た。

お世辞にも新しいとは言えないそのホテルを選んだのは、単に二次会のカラオケボックスから一番近かったと言っただけのこと
で、

恐らくは今後二度とは使わないだろうなと、部屋に入る前から思っていた。

酒を飲まない俺が備え付けのグラスに注いでやると、祥子はさっきまで散々に
飲んだはずのビールを、また一氣にあおって飲み干した。

「さあ寝よう。明日早いんだ。」祥子はそう言つと、今度は自分で二杯目をついだ。

「まだ飲むのか？明日は日曜だぞ、そんなに早いのか？何時？家まで送るよ」

俺はそう言つて祥子の目を覗き込んだ。

「うん、お願いね。何よ？そんなに見ないでよ。」

祥子は、そう言いながら、いかにも恥ずかしげに照れ笑いを浮かべた。

「ホント飲み過ぎちゃった。これでやめるね。」

「朝7時には家に帰りたいのよ。日曜だけど子ども達クラブだから。
旦那は泊まりでゴルフだから、そっちはいいんだけどね」

そう言いながらビールをグラス半分残して もうおしまい と言う風に、
右手でグラスにふたをする仕草をした。

その後、祥子は、ホテルのネーム入りのライターを手に取ると、タバコに火をつけ、
ふーっと、まるで何かしら一仕事を始めようとするみたいに、大きく吸い込み、
煙をやけに細く長く吐き出した。

そして、やっと初めて俺の方を真っ直ぐに見た。

俺が左手で肩を抱き寄せようとすると、祥子は
「これだけよ」といいながら、自分からほんの短いキスをしてみせた。

「シャワーは？」と聞くと祥子はすぐに
「いらない。」と答えた。

「そのまま寝るのか？」

「うん。飲み過ぎて、おまけに歌い過ぎたから疲れちゃった。今、すっごく眠い。」

祥子はそう言いながらタバコをもみ消すとベッドに身体を投げ出した。

俺がシャワーを浴び終えた時には、祥子は本当に寝入ってしまった様に見えた。

「服を着たまま寝るのか？シワになるぞ、脱げよ。」と声をかけたが、反応はなかった。

俺は祥子の上着だけを脱がせてハンガーにかけた。

この状況で寝るか？と幾分呆れながら、いかにも不満気な分身をトランクス越しに見おろして おい、残念やな と小さく笑いながら心の中でつぶやいた。

部屋のヒーターが少し強すぎたが、上手く調整できなかった。

のどが渴いた。

祥子の飲み残したビールにほんの少し口を付けてから、思い直して冷蔵庫を開けた。

ポカリスエットを取り出し、プルトップをおこした。一気に飲んだ。

ソファアに腰掛け、タバコにジッポアの火を移した。

いつもよりゆっくりと、タバコを吸った。

三本目を吸い終えたところで、ようやく少し眠気がした。

俺は、トランクス一枚だけの、二月終わりにしては寒すぎるかも知

れない格好で、
祥子の隣に潜り込んだ。

第一章「同窓会」その四

出来るだけそつと潜り込んだつもりだった。

祥子が寝返りをうつように俺の方に顔を向けた。

目は閉じたまま「あつゝい」と声を出した。

「なんだ、起きてたのか？すつかり寝てると思った」
俺が言うと、祥子は右目だけをようやく薄く開けた。

「寝てたわ、今まで。のど乾いた。ねえ、今何時？」
上目遣いに俺を見あげて尋ねた。

「3時過ぎかな、これしかないが」
俺は冷蔵庫からウーロン茶の缶を取り出して渡した。

「そう。ありがと。」短く言って缶をあけた。

「あゝあ、美味しい」

そう言って祥子は半分ほど飲んだウーロン茶の缶を、
たった今隣に横たわった俺に向けて差し出し、 飲む？ と眼で尋
ねた。

俺が寝転んだままの姿勢で頷くと、祥子はちよつと首をかしげた
様に

微笑んだあと、ウーロン茶を含んだ唇を俺に与えた。

ウーロン茶と一緒に、少し酒の匂いが入ってきた。

そして、その後を追うように、遠慮がちに祥子の舌が入って来た。

その感触を、俺は好ましい気分で味わった。

何度もキスを繰り返した後、くびれた背中に左手を添えて反転させるように覆いかぶさると、祥子は下から見上げながら

「だめよ」

と今更の様に口にした。が、俺の唇が首筋にふれると、すぐに眼を閉じた。

少し頭をのけぞらせるようにした祥子は、自分の奥深くで目覚めた快感を

一心に追い始めた。

初めて目にする祥子の躰は、年令の割にとの前置きが必要ないほどの、

若く均整のとれた躰だった。

俺は覚えたばかりの高校生のように、祥子を求めた。

いつしか俺は、高校時代の屈託のない笑顔を見せていたあの祥子が、そのまま、今ここに居るような錯覚に襲われた。

「祥子」と呼びかけた。

それを合図にするように、祥子は激しい反応で俺を誘い、

二人はほとんど同時に果てた。

終わったあと、祥子は一旦巻き付けたシーツを、少し暑いのか、もう一度胸の下までずらし、乳房をスモール球の光にさらして眼を閉じていた。

ほんの少し残っていたウーロン茶を飲み、ベッドを出た俺は、ベッドの脇に散らかしたままになっている祥子のブラウスや、スリートやらを、

まとめてソファーに置いた。

そうして俺が隣に戻ると、祥子はおどけたような口調で、

「やっちゃった」と言った。

「やっちゃったか。ハハハ、そう、やっちゃったな」

俺は可笑しさに耐えきれず笑った。

そしてまだ半分笑いながら、右の手のひらで、祥子の柔らかな胸をおおった。

すると祥子は身体をこちら向きにして、俺の胸に顔をうずめるようにしながら

もう一度つぶやいた。

「あゝあ、やっちゃった」

いつの間にか祥子は、俺の腕の中で安心したような寝息を立て始めた。

俺は祥子の髪をそつとなでながら、しばらくの間、その寝顔を見つめていた。

第二章「再会」その一（前書き）

同窓会の夜から、ちょうど一週間後、祥子からメールが届いた。同窓会には仕事の都合で行けなかった藤川を伴って、祥子の友人との四人で、食事をする約束が出来上がった・・・

第二章「再会」その一

祥子からメールが届いたのは、あの日からちょうど1週間経った土曜の午後だった。

祥子のメールはまるで何事もなかった様にこう切り出した。

「ねえ、明日の日曜日、暇？夜なんだけど…あたしの友達がさ、同窓会の楽しかった事話したら、そんなにノリのいいメンバーなら一緒にカラオケでも行きたいなって言うのよ。ねえ、藤川君とか誘えない？」

（誰でもいいんだけど、貴方一人では、いい女二人の相手できないっしょ）どう？」

一週間。あの日以来、何も言って来ない祥子に対して、やはり一度きりにしたいのかなと、少なからず失望していた頃だった。

俺はすぐに返信した。

「OKだよ。で、そのお友達ってのは？
誰か誘うにしても、もう少し情報寄せよ」

2分後、祥子から

「今一緒だから写メ送るよ。あたしより若いよ。三十七才。
×1。こぶなし。ちよっとお嬢様タイプだよ。（手に負えないかもよ）」

「ナンバ、7時でいい？」と寄越した。

*

藤川とはナンバークスの正面玄関で、六時に待ち合わせた。祥子との約束までには一時間の余裕を持たせた。

高校時代の友人の中でも、藤川は俺にとって別格だった。ずっと交流もあり、他の誰よりも信用できた。何でも話して差し障りのない男だった。

藤川の結婚式では、俺が司会をし、俺の時には、藤川がした。そういう間柄だった。

藤川が女房と別れるときのゴタゴタにも、当然の様に巻き込まれた。

裁判所での調停にも付き合わされた。

子供のいない場合でさえ、いざ離婚をするとなると、こんなにややこしいことになるのかと、俺はうんざりした。

その時のことを藤川に、「貸しだぞ」と言っと、

「こんなのも経験しておく、お前の時に気楽だろ。」と訳のわからない言いようで済まされた。

祥子の寄越した写メで、その「お友達」を見た時、俺は一瞬で、「藤川のタイプ」だと見抜いた。

藤川に転送したメールに俺は、

「ビンゴやる？ちよつと写真小さいけど、美人には違いないね。一次会はお前の奢りでよろしく！」と書いた。

いつも仕事に追い回されている藤川が、珍しく六時ちょうど、時間通りに現れた。

近くのドトールで、しつかり一時間をかけて練った

「作戦」は、俺の立案だった。

「成り行きに任せる。」

約束の七時を五分過ぎた時、俺の携帯が震えた。祥子だった。

「どこ？もう着いてる？」電話の向こうで、ガヤガヤと喧噪の音が聞こえた。

「ああ、着いてるよ。祥子は？今どこ？」

「正面玄関。どこよ、見えない。あつ！見えた。」

大きめの花柄をあしらった黄色いセーターと、白いフレアスカート。

祥子は同窓会で会った時より女らしさを強調した服装で現れた。とても似合っていた。

その祥子の後ろで、控え目にこっちを見ている「友達」は、グレーのスーツを鮮やかに着こなしていた。隙のない服装だった。

俺は祥子のメールの（手に負えないかもよ）という文言を思い出

していた。

第二章「再会」その二

「おつす！早くから来てたの？待たせたかな？」

祥子は俺と藤川を交互に見て言った。

「いや、俺らも、たった今、来たばかり」

そう応えた俺の隣で、藤川も黙って頷いた。

「そうそう紹介するね。こっちが准哉君、サトウシュンヤね。」

「それから、こっちが藤川君・フジカワアキヒコ・身長185cm。デカイやる」

祥子は、傍らの「友達」を見やって、手早く俺達を紹介した。

そして今度は俺達に向かって言った。

「こちら、坂本佳代子さん。カヨちゃんね。よろしく。」

紹介された「友達」は、にっこりと上品に微笑んだ。

「いやだ〜カヨ。あんた、またかぶってるの」

いきなり祥子からそう言われたカヨちゃんは、ちょっと困ったような表情で俺達を見た。

その時俺は、藤川が何かしら、物思いに耽ってしまっているのに気づいた。

千日前通りの南側、新築されたばかりのビルの地下に、オープン間もない居酒屋があった。

店の電飾には「洋風居酒屋」とある。

「ここにしょっ」と祥子が言った。

入り口の間接照明の淡い光が、その店がまんざら悪くはなさそうに思わせた。

全員が同意すると、祥子とカヨちゃんは先にたつて地下への階段を降りた。

後に続こうとした俺の腕を、藤川が掴んだ。

「ん？なんや？」俺の問いかけに藤川は、

「あの子、知ってる。会ったことある。写メじゃわからなかったけど。」と言った。

「えっ、カヨちゃん？いつ？」俺は藤川の意外な言葉に興味を引かれた。

「彼女は忘れてるかもしれないが・・・」

先に行った二人を待たせていることが気になった。

俺がちらと入り口に目を向けたことも、無視して、藤川は続けた。

「七、八年前・・・八年前や。俺が名古屋に居た時や。」

藤川はその頃、大手化粧品メーカーの営業で、名古屋に単身赴任していた。

藤川の離婚の原因は、大部分その間の浮気にあった。

浮気をしたのは藤川だけではなかった。

藤川が単身赴任中の侘びしさを、馴染みのスナックのホステス相手に解消している間、

藤川の妻は、こちらでも独り寝の寂しさを浮気で紛らわせていたのだった。

調停では、どちらが先に浮気をしたかが一度話題になった。

だが、所詮はお互い様だということで、その点で藤川が不利な扱いを受けることはなかった。このことは慰謝料計算で藤川を大いに助けた。

もしもあの時、藤川の浮気が大阪に居たときから始まっていたと知れていれば、

今の藤川の生活はもっと厳しいものになっていたはずで、そのことは藤川にとっての
アキレス腱であった。

当時、事情を全て知っている俺に向かって藤川は

「生かすも殺すもお前次第だな。」と笑えない冗談を言ったものだった。

その藤川の「名古屋時代」に何があったのか？

藤川にしろ俺にしろ、男というものは、浮気をしたときに、

本来はその性質上、他人に知られないようにするのが当然であるのに、

どこかで多少自慢したいような気持ちをもってしまう厄介な習性がある。

「カヨちゃん」は、もしそういう事があったなら、藤川が当然得意げに

自慢しているはずの、いい女だった。

だからこれは「艶っぽい話」ではないはずだと俺は思った。

「藤川、間違いないのか？人違いじゃないのか？」俺はまず基本的な確認をした。

「多分・・・名前はたぶん一緒、苗字は違うかも。」案の定、頼り

ない返事が返ってきた。

「なんや、頼りないな。本人に聞いてみたら？」

「うん・・まあ」藤川は困ったような表情を見せた。

「聞きにくいことみたいやな。」

俺は店の入り口を見ながら言った。俺の視線を追って藤川が言った。

「そんなことないけど・・待たせたらまずいな。行こう。」

緩やかにカーブした階段を降りると、そこがすぐ店の入り口になっていた。

待ち受けていた黒いスーツのボーイが、

「お連れ様は、一番奥のお席でございます。」と言いながら、いかにも洗練された態度で、その席まで案内をした。

第二章「再会」その三

「どしたん？なんかあった？」祥子が尋ねた。
俺はタバコを買ってたと言いつた。

四人掛けの正方形のテーブルに、祥子とカヨちゃんが隣り合わせに座っていた。

俺は祥子の横に座った。

残った席に藤川が座ると、ボーイがやってきた。

「取りあえず」と頼んだ中ジョッキが、待たされることなく届いた。

「じゃあ、まずはカンパニー！」祥子が明るく言った。

「カンパニー！」

「乾杯。」カヨちゃんと藤川が、ジョッキを合わせた。

俺は、祥子、カヨちゃんと順にジョッキを合わせ、最後に藤川に

「ほい、お疲れさん」と声を掛けた。

「藤川君、お疲れなの？」

祥子が藤川の顔をのぞき込むようにして言った。

「いやいや、そんなことないよ。」

藤川のジョッキはもう既に空になりそうだった。

「こいつ、今日の時間作るために、昨日ほとんど徹夜したらしいんや。」俺が言った。

「うっそ、大変。無理させたの。ごめんね。」

祥子が本当に済まさそうに言った。

「お仕事忙しいんですね。営業ですか？」カヨちゃんが尋ねた。
「そう。でもそんな無理した訳やないよ。そんなに忙しくないよ。
たまたまね。」

藤川は俺に 余計なこと言つな と目で言つた。

その後は、祥子とカヨちゃんの関係や、二人が夢中のゴルフの話、俺達の高校時代の話や、同窓会に参加出来なかった連中の近況など、ひとしきり会話が弾んだ。

その間、俺は藤川とカヨちゃんの様子を意識して見ていた。

俺はカヨちゃんの表情から、藤川が言つた通り、

彼女が藤川の事を忘れているのは間違いないと思つた。

そもそも、面識などないのかも知れないのだ。

俺は、頃合いをみて、さらに 余計な事 を切り出した。

「付かぬことをお聞きしますが・・・」おどけた調子で言つた。

「はい、何でしょう？」祥子が応えた。

「違つて。カヨちゃんに。」

俺はカヨちゃんに身体を向けた。カヨちゃんが俺を見た。

「こいつと前に会つたことある？」右手の親指で藤川を示して聞いた。

「えっ？前に？ないと思うけど・・・えつと、どこかで会いました？」

カヨちゃんは藤川をちらつと見た後、意外な質問に戸惑つたように、

逆に聞き返してきた。

「名古屋で。」俺が言うと、藤川が横から

「八年前」と付け加えた。

「えっ、うそ。カヨ、名古屋にいたもんね。」祥子が驚いた様に言った。

「うん。そう。でも、どこで・・・」

カヨちゃんはまじまじと藤川の顔を見て、その後、遠い記憶を辿るように、少し眉間にしわを寄せた。

もはや人違いなどではないことを確信した藤川は、カヨちゃんの記憶が、自分にピントを合わせてくれるのを待っていた。

ほんの数十秒だったかもしれない、長くて一分、カヨちゃんの表情が変わった。

「あつ。あの時の・・・金山の商店街？」

「そう。やっぱりそうか。あゝすっきりした。」藤川がにっこり笑った。

「元気そうだなによりです。」藤川の表情は、すっかり明るくなっていた。

「あの、あたし・・・あの時は本当にありがとうございました。」
「お礼も言えなくって」

「随分探したんです。警察の方にもお願いして・・・」
「でもお名前も判らなかつたし。本当にありがとうございました。」

「

カヨちゃんはそう一息に言つと、うつすら涙を浮かべた。

「ねえねえ、何よ？全然わからない。どうゆうこと？」祥子が不満げに言つた。

「ほんまや。わからんよな。判るように説明しろよ。差し障りなかったら。」

俺は祥子に同調して言つた。

感極まつて、時折涙声で話すカヨちゃんの話と、藤川の話とを総合すると、

およそ次のような話だった。

第二章「再会」その四

その「事件」は、名古屋駅からＪＲの在来線で一つ目の、金山駅前商店街で起こった。

八年前の６月。金曜の夜、十時過ぎだった。梅雨の最中ではあったが、その日は夜まで快晴で、かなり暑かった。彼女は花柄のワンピース一枚の軽装だった。

当時、彼女は、夫の仕事の都合で名古屋に居た。彼女もＯＬとして市内で働いていた。

その日は社内の送別会を二次会まで付き合い、自宅のある金山駅まで帰って来た時だった。駅前の商店街を通りがかった時、既に時間も遅く、商店のシャッターは全て閉まっていた。

人通りも少なく、彼女は急ぎ足に通り抜けようとしていた。前から来る二人組の男に気づいたのは、ちょうど商店街の中央辺りだった。

不安に襲われて、後ろを振り返った。

後ろからも二人組の男が近づいていることに、その時初めて気づいた。

後ろから来る二人の速度が早まった。

恐怖で声が出なかった。

その場に立ちつくしていた。

四人の男達は、ほとんど無言で彼女を取り囲んだ。

いずれも十九か二十歳位の男達だった。

商店街の中央。

逃げ場はなかった。

他に通りがかかる者も居なかった。

両脇から二人の男に腕を捕られた。

弾みでワンピースの脇が音を立てて裂けた。

傍らの男がニヤツと笑った。

恐怖で躰が震えた。

そのまま、引きずられる様に、商店街の奥に引っ張られた。
商店街の出口近くに白いセダンがあった。

頭を押さえつけられ、後部座席に入れられようとした。
もうダメ！そう思った。

その時、初めて四人以外の人間の姿が見えた。

グレーのスーツを着た、恐らくはサラリーマンらしい長身の男。
商店街を反対側から入ってきたところだった。

初めて声らしい声がでた。「助けて」と。

「こらあ、なにしとんじゃ！」

大声で走ってきたスーツの男が藤川だった。

四人組の男達は突然の乱入者にたじろいだ。
彼女の腕が自由になった。

「われ、なにさらしとんじゃ」

藤川は四人組を目前にして、もう一度威嚇した。

男達の標的は藤川になった。

今しがたまで彼女の腕を掴んでいたと思われる茶髪の男が、
右手で藤川の襟首を掴もうとした。

その手を藤川が左手で払った。顔面にストレートを入れた。
顔を抑えてうずくまる男の両肩を抑え、そのまま鳩尾に膝蹴りを入れた。

男は膝から崩れ落ちた。

「逃げる」藤川は彼女に向かって叫んだ。

運転席と助手席の男は、車から出ていなかった。

彼女は藤川の指示に素直に従った。

藤川の左腕に衝撃がきた。

男が金属バットを持っていた。もう一度振りかぶってきた。

横殴りに振られたバットを、かろうじて避けた。

思い切り振った男の手からバットが滑って離れた。

バットをなくした男は、左側から藤川の腰に組み付いてきた。

藤川は組み付かれたままの姿勢で、男の背中を半開きのままの
後部ドアにぶつけた。ドアが閉まると同時に、男の腕がゆるんだ。

男の正面に向き直った。

渾身の蹴りを股間に入れた。

グウとくぐもった声を出して、相手が崩れていった。

その時、セダンが動いた。セダンは仲間二人を置き去りに走り去った。

先に倒れていた男が車を追うようにフラフラと立ち上がった。

後ろから藤川が飛びついた。

弾みで男はそのまま、顔面から地面に激突した。

グシャッと鈍い音がした。

彼女は走った。「誰か助けて下さい」と叫びながら走った。

公衆電話がなかなか見つからなかった。

携帯電話はまだ持っていないかった。

やっと見つけたのは、自宅マンションの管理人室前だった。

警察に電話をした。現場とは別に、彼女の自宅にもすぐ警官が来た。

現場には、怪我をした男二人だけが残されていた。

藤川の姿はなかった。

彼女が藤川の所在や安否を確かめる術は何もなかった。

警察の調べで、先に捕まった二人の供述から、

藤川が連れ去られたのではないことは判った。

警察は藤川の行方を捜した。

双方の人数その他、状況から見て正当防衛であることは明らかだ

った。

藤川の怪我が案じられたが、先に捕まった二人の男の様子から、恐らくは軽傷であろうと思われた。

逃げた二人も程なく逮捕された。警察の藤川探しはすぐに終わった。

事件はローカルニュースでも流れたが、彼女のヒーローはついに名乗り出ては来なかった。

一通りの説明を聞いた後、祥子が大きな声をあげた。

「ちよつち待つて！めっちゃめっちゃカッコいいやん。」

周りの席から視線が集まった。

「怪我したんですね。ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

藤川の話聞きながら、ずっと泣いていたカヨちゃんが、またハンカチを出した。

「俺の怪我は大したことなかったから。それより、片方が死んだかと思つて

ちよつとビビッタけどね。ニュースで生きてるって知って、ホツとしたよ。」

藤川が笑った。

「ボコボコにしてんなあ。それにしても四人相手にやるなあ。」
俺は感心して言った。

「二人が逃げてくれて助かったんや。あいつらが居たら危なかった。」

藤川の言葉に、カヨちゃんと祥子が、同時に「うんうん」と頷いた。
カヨちゃんはともかく、祥子までが、藤川をうっとりとした表情で見つめていた。

俺は やられたな と思った。

この時俺は、今日の主役の座を、潔く藤川に譲ることにした。

第三章「二人と二人」その一

第三章 『二人と二人』 その一

もともと藤川はマメな方ではなかった。
女に対してだけでなく、男に対しても。

年賀状の類も、俺からは藤川に毎年送るが、藤川から返ってくることは、
ただの一度もなかった。

あまり人付き合いの上手い方ではなかった。
おそらく藤川のところにやってくる年賀状は、
毎年着実に少なくなっているはずだった。

阪神高速湾岸線を南に走り、「りんくう」で降りた。
海沿いの臨海線に出た。

「アキヒコさ、カヨに毎日メールして来るって。」と祥子が言った。

「ふーん、そうか。」俺は藤川の「本気」を感じた。

初めて四人で会った日から、四ヶ月近くが経った、六月。梅雨だった。

車載テレビの天気予報では、明日からの一週間が、概ね快晴であることを、

まだ幼さの残る若い女が告げていた。

その後はまた梅雨らしい天気が続くでしょうと言っていた。

いつの間にか、祥子は藤川のことを「アキヒコ」と呼ぶようになった。

っていた。

藤川から俺に届いたメールで、藤川がカヨちゃんのことを「カヨ」と書くようになったのは、再会の日から一週間くらい後だった。

その一週間に、二人が毎日会っていたことだけは知っていた。

「そういうこと」かと思った。

俺と祥子、藤川とカヨ。この四ヶ月で、四人が揃ったのは、最初の日以外に二度。一度はテニス。

四時間のテニスの後、カラオケで夜が白むまで歌った。俺はカラオケボックスで、寝てしまった。

もう一度はゴルフだった。

カヨの父親がメンバーだという奈良の格式あるコースだった。祥子もカヨもゴルフは上手かった。

カヨが92、祥子が96。

優しいコースではなかったから、女性なら上出来だった。俺が90。藤川は104を叩いた。

藤川のゴルフは思い切りが良かった。

ドライバーが当たれば、300ヤードに届いた。その分、OBも出たが、見ていて気分が良かった。

3番ミドルのティーショットでアイアンを持った俺に、藤川が、「セコイぞ」と悪態をついた。

だが、そう言ってドライバーを持った藤川は、案の定、

左の林にボールを食わせた。

同じ所にもう一度入れた後、藤川はやつとアイアンに持ち替えた。藤川のゴルフは、そう言った意味では、確かにセコくはなかった。

四人で会うときの打ち合わせ以外、

藤川と俺が連絡を取ることは、そう多くはなかった。

藤川とカヨがどの程度の付き合いになっているのかは、祥子の口から聞くばかりだった。

たぶん、藤川も、俺達の事は、カヨから聞いているのだろうつと思っていた。

第三章「二人と二人」 その二

海を見たいと言いだしたのは祥子だった。

「紫外線が怖いなく」と言いながら、

「だつたら止すか？」と言うと、

「ガンバって、行く」と言った。

少しばかり海を見に行くのに、一大決心しなければならない女は、
気の毒だと思った。

「昨日、大丈夫だった？」

俺の手から缶コーヒ―を受け取りながら、祥子が聞いた。

昨日。藤川から来たメールを、俺の妻が見た。

返信した後、俺がすっかりして携帯を、開いたままテーブルの上に置いていた。

藤川からのメールが、画面に残っていた。

そのことを気にしていた。

その時妻は、「いい歳をして。」とだけ言つて、冷たく俺を見た。

「うん、大丈夫。心配ない。」

灰皿を引き出すと、祥子がタバコを一本抜いて寄越した。

「甘いなく、准哉は。女を甘く見たらダメよ。」呆れたように

祥子が言った。

「うん、いや、知つてるとおもうよ。知つてて、何も言わない。」

「昔からそう。俺に興味ないからな。」

手探りでジッポーを探すが見つからない。

祥子が、自分のライターを差し出した。受け取って、火をつけた。

「あなたが優しくしてあげないからよ。たまにはデートでもしたら？」

俺の知る範囲では、女はこの手の矛盾した発言を、いとも平気でする。

妻が聞けば、逆切れしそうだと思った。

シートの下でジッパーが手に触れた。時折隠れるライターだった。

「そのうちな・・・おい、右。」りんくうパークの人工砂浜が右手にあった。

「わー、きれい。キラキラしてる。すっごーい。」祥子が歓声をあげた。

車を止めた。祥子は黒い日傘を持って、俺より先に、波打ち際まで歩いて行った。

その日の昼食は、りんくうアウトレットの北京料理店だった。

二時少し前だった。

「海側の席がいい。」祥子を選んだ席から海が見えた。

平日で店の中はすいていた。ランチタイムは終わっていた。

いくつかの単品をとり、二人で分け合った。

食事の間、祥子は飽きずに海を見た。

俺はずっと祥子を見ていた。食後のコーヒーもそこで済ませるところにした。

祥子が、藤川からのメールを、俺に見せた。
顔文字や絵文字を上手く使っていた。

「これあいつの？」

俺は藤川の意外な一面を見た気がした。

「おとといの夜ね、カヨと二人で、アキヒコをメール責めにしたの」祥子が笑って言った。

「あいつ、こんなん送るんや。」俺はまだ感心していた。

「面白いよ。カヨと二人で大爆笑よ。」祥子は何かのメールを探していた。

「あつた、これこれ。ねえ、見て。これ、最高でしょ？」藤川のメールを見せた。

「なんじゃこりゃ？」泣き顔のマークが無数に並んだ後、
「今度は俺とデートしような」

と書いてあった。

「祥子とデート？藤川の奴、ゆるせんなあ。」俺が言うと、祥子が、

「だから、これが・・・」祥子は、次々とメールのやり取りを見せて、説明をした。

俺は、その内容よりも、あの筆無精の藤川が、これほどマメに、メールなどをしていることの方に、驚きを覚えた。

「藤川も頑張ってるな。男も、女で変わるなあ。」

そう言うと、祥子は、にっこり笑って、

「冗談だからね。これ。」と、必要のない言い訳を言った。

第三章「二人と二人」その三

夜になって、藤川からメールが来た。

藤川「昨日、なんか悪かったな。大丈夫か？」

俺「別に、お前のせいじゃないぞ。俺がすっかりしてた。」
「それに、大丈夫じゃない方がいいかも・・・（笑）」

藤川「この際、もめてもいいと？」

俺「かもな。どっちにしろ、今は、なんともない。」

藤川「だろうと思った。今日、会ってたんやろ？祥子ちゃんと。」

俺「何でも知ってるな。（笑）りんくうに行ってた。」

藤川「カヨも行きたいって。いい店を見つけたって？」

俺「北京料理。料理も旨いが、窓側なら景色もいい。天気次第だが。」

藤川「どこにある？カヨと明日行くよ。」

俺「りんくうアウトレット。二階だったかな？すぐにわかる。」

藤川「わかった。ところで、明日の夜、時間あるか？十一時位になるが。」

俺 「いいけど、デートじゃないのか？」

藤川「明日はそんなに遅くならない。行く前に電話する。」

俺 「わかった。」

藤川の用件、察しはついた。藤川とカヨはどちらも独身だった。俺と祥子の場合は、厄介だ。どちらにも家庭があった。

藤川を得たカヨが、祥子の前で、どの程度はしゃいでいるか。容易に想像できる。

祥子とカヨは、一時期同じ職場にいたことがある。歳は違うが、お互いに一番気の合う友達と言っていた。だからともに仕事を辞めてからも、ずっとつき合いが続いている。

祥子と知り合ったときには、既にカヨは「独身」だった。「カヨの実家はお金持ちなの。旦那の収入に頼る必要もなかったから、あっさり離婚を切り出せたのよ。」そう祥子が言った事がある。

「あたしはダメだけど」と、その時、祥子は付け足した。カヨの離婚の原因は、よくわからない。ただ、夫がかなり無神経な男だったことは確からしい。子供がいなかったことが幸いだった。わずか二年の結婚生活。

例の、商店街での恐ろしい体験の夜に、カヨの夫は

「お前のその格好がいけないんだ。」となじった。

事件の三日後に、カヨは大阪の実家に戻ったと、いつか祥子に聞いた。

「こんなに優しい男の人に、今まで会ったことがないわ。」

藤川のことを、カヨがそう言ったと、祥子から聞いた。

「カヨは本気よ」とも言った。

おそらくそうだろう。二人の間には、なんの障害もないのだから、
「本気」でいい。

祥子が、幸せを満喫しているカヨと、自分を比べて、なにがしかの複雑な思いを持っても当然だろう。祥子は悩んでいるはずだった。

祥子は、家庭を大切にしていた。話に聞く範囲では、夫に対しても献身的で、子供達にも十二分に愛情を注いでいた。祥子自身、「夫のことは嫌いではない。」と俺に言わなくても良さそうなことを口にしていた。

平和な家庭だった。穏やか過ぎたのかも知れない。そんな祥子にしても、夫に対して、多少の不満はあった。それを祥子は全部自分の中で消化してきた。ずっと・・・。

それが、いつの間にか、本人の気づかない中に、消化しきれなくなっていた。

そんな時、俺に出会った。

第三章「二人と二人」その四

翌日の真夜中、十二時前に藤川と会った。26号線、鳳北町のデーズ。

二人ともドリンクバーを頼んだ。

「遅くなって悪かったな。」アイスコーヒーを入れながら、藤川が言った。

「デート出来なかったんだってな？」氷バサミを使いながら俺が聞いた。

「うん。仕事でな。急に現場がはいった。」建築機材のリース会社ではよくある話だ。

「カヨちゃん、怒ったろ？」席に着いてすぐ、タバコをくわえながら聞いた。

「怒らないが、ちょっとすねてた。」藤川が困ったような顔をした。

「まあ、お嬢さんは暇だからな。」俺が揶揄するように言うと、

「そうだな。時間作るのが大変や。」藤川が眉間にしわを寄せて笑った。

藤川は営業だった。現場が立て込むと、目が回るほど忙しかった。その反面、直行直帰も認められていたし、スケジュールを調整すれば、一日まるまる空けることも出来た。

カヨと付き合うようになってから、藤川は、仕事を超効率的にした。言い換えれば、手を抜くようになった。

「このままだと、出世はないな。」藤川が笑って言った。

「それは、元からだろうが。」俺がそう言っていると、藤川は「ごもつとも。」と言った。

お互いのアイスコーヒーが空になった頃、藤川が言った。

「祥子ちゃん、・・・考え込んでるみたいやな」言いにくそうに言った。

「わかってるよ。ずっとや。最近ずっと。」

俺は、最後の一本を抜いて、キャビンマイルドのボックスを握りつぶした。

「カヨが心配してた。かなりまいってるって。」藤川の言い様は、少し癪に障った。

「わかってるよ。言われなくても。俺達は、お前達とは違う。」俺の言いようが少し強かったのか、藤川が慌てた。

「いや、うん、そう、わかってるよな。カヨも心配してるから。」

藤川は同じ様なことを繰り返した。まだ何か言いたげだった。

「祥子がなんか言ったのか？」俺は、藤川の目を見た。

「眠れないらしい。」藤川がぼつりと言った。「睡眠薬飲んでるって。」そう続けた。

「本当か？うそやろ？」俺はタバコをもみ消した。

「祥子ちゃんがそう言った訳じゃない。たまたまカヨの母親が祥子ちゃんの通ってる医者から聞いたらしい。」藤川がタバコを差し出した。俺は いらぬい と首を振った。

「医者がそんなこと他人に言うのか？守秘義務があるだろ？」腹が立った。

「カヨちゃんの親が同じ主治医で、二人の、付き合いを知ってたからじゃないのか？」

「当然知つてると思つたんじゃないのかな？」藤川のいい方が、まるで医者を弁護するように聞こえた。

「勝手な判断や。ひどい医者や。」吐き捨てるように俺は言った。

俺は言いようのない怒りを感じていた。

他人の秘密を軽々しく話す医者に、それを聞いて娘に伝えたカヨの親に。だが、この時、俺がもっともつと憎んだのは、「俺自身」だった。

祥子の心をこんなにも苦しめている俺自身。

祥子がそれほどまでに悩んでいたことに気づかなかった俺自身。そして、祥子がそのことを相談できなかった俺自身。

「どうしていいかわからない」

「祥子が何も言わないから、普通に、いつも通りに振る舞ってる」カヨがそう言うのだ、と藤川が言った。

「心配かけて悪いな。」俺はそう言つて、藤川を見た。

「コーヒー入れるか？」藤川が聞いた。

「そうだな。飲んでから帰ろう。」俺はだまって藤川のタバコを一本抜いてくわえた。

藤川がグラスを二つ持つて、席に帰ってきた。半分飲んで、席を立った。

一時を過ぎたにもかかわらず、席は半分近く埋まっていた。

帰り際になって、店の中が結構騒がしいことに初めて気がついた。

どうすればいい？祥子のために。何ができる？俺に。

出口のない迷路に入り込んで、俺の心はもがいていた。

祥子を失いたくはない。

心が悲鳴をあげた。

第四章 「涙」

祥子が睡眠薬を服用していることを、俺にうち明けたのは、藤川に聞かされた少し後のことだった。

眠れなくなったのは、決して貴方とのことが原因ではないからと、祥子は言った。

医者は、自然に治るからと言っていていると。無理に服用を辞めずに、薬を使いながら、気持ちを楽にしていれば、急に治ったりするものだ。

「准哉といるときが、一番幸せなの。一番楽なの。」

だから、お願い、気にしないで欲しいと祥子は言った。

俺は、祥子のしたいようにさせた。今まで通りがいいと、祥子が言った。このままで良いと。

俺は、「そうしよう。」と言った。

思いの外、雨の少ない梅雨だった。

時は梅雨明けかと思わせて、また少しだけ降った。

七月になって雨はなかった。後になって、梅雨明けでしたと言つのかも知れない。

このところは、週に二回、大抵は火曜と木曜の午後に出会っていた。どちらかの都合で会えない時は日を変えた。この日は金曜だった。

七夕だった。

淡いピンクのシーツで胸のすぐ上まで隠し、顔がこちらに見えないように、首だけを左に向け、ベッドの左端を見つめる様な姿勢で、祥子が泣いていた。

祥子が涙を見せることに、いつも大した理由があるわけではなかった。少なくとも、俺には、祥子が何故泣くのか、本当のところは判らなかった。

嬉しいと言っては泣き、哀しいと言っては泣く。

会いたいと言って泣き、会ってはいけないうって、また泣く。

俺の前で、初めて祥子が泣いたのは、二度目の時だった。

その日、「こんなに人を好きになったの初めて」そう言って、祥子は泣いた。

「もっと毎日でも会いたい」と言った後、「困らせてごめんなさい」と、また泣いた。

心と体が混乱しているの　メールにそう書いて寄越したことがあった。

普段は、屈託のない笑顔で、誰にも愛想が良く、底抜けに明るい祥子だった。

その祥子が、こんなにも泣き虫になることが、不思議で仕方なかった。

それでも、それが、俺への情愛から来るものだと考えれば、悪い気はしなかった。その時々、感情を素直に表すことが、祥子にとって必要なのだと思った。

だから、俺には、今日の涙も、取り立てて意味のあるものには思えなかった。

いつものこと。そう思っていた。

「カヨと藤川君、結婚するって」祥子が言った。涙声ではなかった。

「ほんと？」俺はまだ知らされてなかった。

「昨日、プロポーズされたって。カヨ、嬉しそうだった。待ってたから。」

祥子は俺に、背中を向けたままで話していた。

俺は部屋の電話を取り上げてから、祥子に聞いた。

「ビールにするか？」

「いらない。コーヒーでいい」と祥子が応えた。

フロントに「アイスコーヒーを二つ」と頼んで受話器を置いた。

「准哉」祥子がこちらを見ていた。

タバコをくわえてから、ジッポーを探した。あちこち探したが見つからなかった。

仕方なくホテルのライターで火をつけてから言った。

「何？」

「別れよ」祥子は短く、しかし、はつきりとした言葉で言った。何故だ？　と言いかけて、飲み込んだ。

「わかった」俺はそう言った。

間があつた。

祥子は何も言わないので、俺は仕方なく言葉をつないだ。

「普通の同級生にしろ。」手の先のタバコを見ながら、そう言った。

またしばらく沈黙が流れた。俺の吐き出した煙が、すーっと消えていった。

「戻るの？ほんとに」ベッドに半身を起こして、祥子が言った。

「戻るよ。俺は。」そう応えた。

「無理よ。」祥子の声が大きくなった。

「むりよ。そんなの絶対無理よ。もう二度と会えないよ。」祥子が泣きながら叫んだ。

俺はベッドに上がった。祥子の隣に座った。短くキスをした。

唇を離すと、祥子は、俺の左肩に頭をもたれさせた。

伝わってくる祥子の肩の動きが、小さくなった。

「寂しいな。」俺は努めて冷静に言った。

「それだけ？」祥子が言った。

「何を言えはいい。」俺はそう言うと、初めて目頭が熱くなった。

「苦しかったの。もう耐えられない。」祥子が吐き出すように、ぼつりと言った。

「ごめん」それ以上は言えなかった。言葉が出なかった。祥子の軀がまた震えた。

背中から抱きしめた。祥子の震えは止まらなかった。俺の腕が

祥子の涙で濡れた。

目の前が霞んだ。祥子の髪が俺の涙で濡れた。
女の前で流した初めての涙だった。

祥子の嗚咽が部屋中に響いた。

俺の胸の中でも同じ音がしていた。

最終章 「忘れ物」

「はいはい、こつち。会費は先にね、五千元。」
甲高い声で優子が受付をしていた。

「京子?」「ええっ! 痩せたね」 「おう増田か?」「こつち来いよ」

皆が、がやがやと思い思いの席についていった。
賑やかな集まりになりそうだと思った。

藤川の顔が見えた。

「おい、こつち」俺が呼んだ。藤川が「よう」と手をあげて応えた。

「あの端っこにしようか?」そう言うと、藤川は頷いた。

「第二回・美しが丘高校・気まぐれ同窓会」受付のテーブルにそう書いてあった。

「気まぐれって?」藤川が怪訝そうに聞いた。

「おとし、去年としなかったからかな。三年前の時に、これからは毎年やろうって決めたのに」俺が言うと、「なるほど。次はいつかわからないな。」藤川が笑った。

「それはそれで・・・」俺も可笑しくなって笑った。

「おっす。オッス。」俺と藤川の背中が同時に叩かれた。
祥子だった。

「おう。来たのか。」藤川が言った。

「よう。久しぶり。」そう言った俺に、祥子が

「ご無沙汰でやんす。」とおどけた。

二年半振りだった。

別れてしばらくして、メールが来た。

睡眠薬がなくなったと。

やっぱり犯人は貴方でしたねと、笑った顔文字が付いていた。

「追伸・ほんとに、もう元気にしてるから。また同窓会で逢おうね。」と書いてあった。

藤川と楽しげに話す祥子の横顔を見て、俺は胸が熱くなった。

タバコをくわえた。

百円ライターを手に持った。

横から、白い腕が伸びてきた。

目の前に、ジッポーの火があった。

「はい、忘れ物」

あの日、ホテルでなくしたジッポー。

祥子がつこり笑って、俺のタバコに火を移した。

懐かしい匂いがした。

完

最終章 「忘れ物」(後書き)

最後までお読み下さり、ありがとうございました。
続編を、近々連載開始致します。
よろしければ、ぜひお読み下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2448b/>

同窓会で逢おうね

2010年10月16日02時12分発行